序章　失敗の始り

◇漆喰（しっくい）を食う

【中　嶋】名古屋城の修理が、左官になって初めての現場だった。あの時は、今でもよう忘れんな。

縄巻きの天井があって、そこに砂漆喰を塗っていくわけよ。塗って行くんだけど、隅ってようけ（たくさん）付くじゃない。隅だけベタベタと付けて綺麗に塗ったわけよ。そこから、ちょっとした事でパーッとそれがめくれて……ちょうど昼ご飯を食べて口を開けていた、そこにガーッと入った。（一同笑）　そうしたら、「漆喰うまいか？」と言われた、大工さんに……恥ずかしかったな。それは今でも忘れんな。隅は厚く付くでしょう。ピッとしっかり押さえておけば良かったのに、何か考え事でもしたかで……。

後で独立して、その大工さんの仕事をやりに行った時に、「お前、漆喰食いよったで。俺その時おったんだが、分かるか」と聞かれ、「分かります」と答えた。もちろん六、七年の間だから覚えているわね。そんな事があった。

ちょうど冬十二、一、二月ぐらいの時に、ずいぶん外部が仕上がってまって、ギョギョウ（懸魚（げぎょ））だけ残っているのよ。何で覚えているかというと、親方が「ギョギョウ

の彫刻は俺がやるで、全部塗ってまうな」と言ったから。そうして親方は、おばちゃん一人つけて、あれは楽しかっただろう、今思うと。綺麗な人だけをつけて、喋りがてら仕事をやってるわけだ。それをシートで囲って、中で投光器点けて、中は暖かいな、風も来んし。二人でべチャべチャ、べチャべチャ。お茶なんか立てて飲んでやってるもんな。

その時に、俺が器用な事が分かってるもんで、「おまえ、これ一つやってみるか」と言われた。今でいうプロ野球のマウンドに、ちょっと上って来い、みたいな勢いで……。一つの葉っぱを仕上げた時に、たまたま高橋さんといって、市の文化財の審議委員さんが来たわけだ。名古屋城の文化財の工事監督は中村義猛さんだったけど。その高橋さんの親は絵描きらしいけど、足場に上がってきて、「懸魚の葉っぱの最後の先っぽは、必ず意識をして、太陽がどっちから来ているか意識をして作れ」と言ったのが記憶に残っている。だから、葉っぱでも生き物でも、最後の先っぽだけは、太陽に向けるというような気持ちで……。だから、それはむこう向いて、これはこっち向いてでは、ものが生きて来ないから、どこかで象徴して作れという気持は、今でもある。

そこで一つギョギョウを作ったら、それを褒めてくれた、おばちゃんが。「親方と同じぐらい出来たで、正雄君、あんた一人でやってもいいんじゃない」と。

【聞き手】親方の話相手だった美人の人ですね

【中　嶋】それは嬉しかったね。その人は褒めてくれたの、「正雄、こんなに綺麗にやったで。大将、

鏝絵（一般の民家）
漆喰で立体的に家紋を造り出している。周囲は黒漆喰の壁なので、漆喰がきわ出って見える。

あんたと変わらんね」と。そういう風に言ったら、親方が上がって来て、「後で悪いとこ直しておくで」と言った。（一同笑）

今でいう鏝絵だね。それ以後は、家紋とか、ああいうのは全部注文があると、俺一人で作った。家紋の本を買って来て、その当時コピーが無いから、本の上に小さな枡目の線を綺麗に引いて、別の大きな紙には大きな枡目を引いて、何倍かに拡大して書き写した。それを全部塗るんだけど、問題は、線のところを浮かすのか引っ込めるか。

【聞き手】本じゃ分かりませんね、立体は。

【中　嶋】分からん。それを自分なりに、植物であればこうだとか……例えば、揚羽蝶のような生き物だと、こうだという事を観察しないといけない、ある程度。

【聞き手】難しいですね。

【中　嶋】蝶を採って来てね……。線は、引っ込んでいても線だし、出ていても線なわけ。そういう仕事をやって、またまた人が褒めてくれるから、作る。作りゃあ、カッコいいと言ってくれる。その連続だったですね。

第一章　失敗だらけ

◇お城の壁が浮く

【中　嶋】あるお城の入り口の大直しの壁が、五十センチぐらい浮いてまった（浮いてしまった）、当時。それは落として、すぐに直したと思うんだけど、今現在どうにもなってないからね。

それから、三階に長押がついていたね。長押を厚く塗れんもんだから、瓦を割ったものを貼って盛っていったんだね。三階の長押、外の長押だね。けっこう持ってる（長持ちしている）。あのころの記憶は全部残っている。

いろんな工法をやって来ているよ。土蔵の修理なんか建物を上げて、土台を取替えることをやろう（やるでしょう）……、そんなときは下の方の壁土を取ってまう。それを仕上げて行くのに、どうやってやろう、ああやってやろうと、かんこうして（よく考えて）工夫していく。

【聞き手】壁土を直線に切ると、荒壁や斑直しも中塗も漆喰も、塗り継ぎが同じ位置になるので、ちょっとずらして切らなければいけないのですね？

【中　嶋】一番いいのは、斜めにポンと切って、被せ、被せ、被せで塗って来ると、塗り継ぎがずれるで。

【聞き手】やっぱり、ちょっとずらした方がいいってことですね。それはそうですね、大きな亀裂が荒壁まで出来ますものね。逆に亀裂の修理をするときも同じですね。

【中　嶋】さっきのお城の失敗だけど、粘土の良い土を使ったから、厚く塗ると反り返ってしまうんだね。だから、失敗したと思う。下げ縄を伏せていくのに、最初四分（十二ミリ）の縄で伏せていこうとするんだけれど、四本ある内の二本は伏せ込むんだけど、もう二本は伏せないで荒壁の上に出して垂らしておくんで、その縄が荒壁の水分を吸うから、五、六分（十五～十八ミリ）くらいに太くなってしまう。だから縄が太いから、どうしてもその後に塗る土がたくさん付いてまう。土を二センチくらい付けないと伏せ込めないから。だから反って失敗したんだと思う。今思うと、縄が四分位だったらいいんだけど、五、六分くらいになってしまった場合だと、一度薄く塗って、次の日にもう一度同じ厚さに塗る方法を考えたり、それから苅を少し入れて、多少粘りをなくしたりした方がいいなと今なら思う。

それからもう一つ、このお城で記憶にあるのは、北と東かな、お堀側の隅の出窓で、大工仕事が遅れたんだね。上の方の荒壁だけ先に塗って行ったので、荒壁の面が外へ出てまった。窓の下の土台が尺二寸（三十六センチ）ぐらいかね、その土台より、三寸か四寸（九センチか十二センチ）荒壁の方が外に出てまったんだね。それに今から土を付けて行っても、工期が間に合わんということで、二寸角（六センチ角）ぐらいの木に棕櫚縄を巻いて土台に打ち付けて、砂漆喰を塗った。その上にまた二

寸角ぐらいの木に棕櫚縄巻きして、砂漆喰を塗って、釘で打付ける。それでまた砂漆喰をこすって（薄く塗って）おいて、それから乾いてからもう一回砂漆喰を塗って、また二寸角の藁縄か苧縄または棕櫚縄巻きを打って外に持ち出して来て、荒壁の面に合わせた記憶がある。こんなのええんかな（いいのか）と思って当時やったけど、今もヒビは入っていないし、落ちてもいない。

【聞き手】角材を打ち付けて、厚みをかせいだんですね。

【中　嶋】三月完成の予定で工期がないし。工期を考慮すると木を打って、薄く塗って、木を打って、薄く塗って、早く乾かして仕上げするしかなかった。

これは失敗じゃないんだけど、今も思っているのは、松の葉っぱの陰とか……やっぱり陽の当たらん所が、早く漆喰が悪くなる。乾燥が、一番漆喰を長持ちさせる。今、そのお城へ行っても、松の枝とか何かがあって、年がら年中、直射日光が当たらない所は黴が生えてまってる。黴の生えない所は、漆喰が長持ちする。

◇麻縄が粉になる

【中　嶋】意外と悪かったのは、また別のお城で、修理してから二十年ぐらい経った時分に、分かった。具合が悪いと言うんで、すぐ見に行ったんだけどね。あれははっきり覚えてるけど、麻縄を木に巻い

たでしょう、当時。そのときに、藁縄か棕櫚縄を使っておけば良かったのに……昔の茶色い小包の縄って知ってます？　小包を結んだりする茶色いヤツ。

【聞き手】麻でしょう。

【中　嶋】あれは麻だけど、悪いな。あれはダメだな。あれより藁縄の方が長持ちする。その小包の縄がもせてまった。

【聞き手】もせる？

【中　嶋】何ていうのかな、腐る意味でもないけども……。足場に上がって見たんだけど、指で触ると、粉になって全部落ちちゃった。なんにも抵抗なく、フーッと。きれいに跡は残った、巻いた跡がね。

【聞き手】麻縄が粉になった。

【中　嶋】あれはもう二度と使うまいと思ったね。今でも売ってあると思うな、玉になって。毛糸みたいになって。やっぱりあれは、それからは絶対に使っちゃいかんと思ったね。藁の方が絶対もつね。

【聞き手】でも、ちゃんとしっかりした麻縄だったらいいのでしょう。

【中　嶋】俺、最近初めて使ったけど、カラムシって丈夫いね。

【聞き手】カラムシって、麻ですよ。麻にもいろいろと種類があるのですね。

【中　嶋】あの小包の縄が、今までの中といったら、それが一番大きい失敗やろうね。

それから別の現場でこんなこともあった。砂漆喰を塗るときに、気を付けないといかんのは、苧苆

を入れるとダメなんや、マニラ苧でないと。苧苧だと細か過ぎて、絡まって塗れへん。マニラ苧がちょっと足らんで苧苧を入れたら、失敗して塗れへんだったことがある。だけど砂漆喰の上塗は、苧苧なんですよ。鋼で押して行くと、マニラ苧だと強いから立ってしまう。苧の腰が強くて起きてしまう。

【聞き手】マニラ苧はマニラロープを切って作ったもので、苧苧の「苧」は麻のことだから、やはり麻にはいろいろあるんですね。

【中　嶋】マニラ苧が江戸時代の古いときからあったかって言うと、分らんけどね。それから意外と、砂漆喰に藁苧を使っているものもあるね。

◇だまされたセメント袋

【中　嶋】文化財の工事の間に、民間の仕事もするんだが。そのときにまた失敗するんやわ。

「今日は、お菓子屋さんに頼まれたから、やって来い。増改築があるで、セメントを塗って乾かさないかんで、今日終わっといで」と言われたから、一生懸命やってね。きちんと塗って、「今日はここまで出来ました」と報告して、「おお、ようやった」と。それで帰って来たんです。一週間ぐらい経って、ちょうど十二月の十日頃なんだわ。お菓子屋さんで、正月に玄関を使うっていうわけよ。今度は先輩が、玄関を塗りに行った。帰ってきて、「ちょっと来い」と呼ばれて、「お前、何塗った？」

と言われて、「セメント塗りました」と言ったんだけど……。セメントと同じ色をしている土があったんよ。それを塗って来たから、仕上がってなかったわけよ。もう一回やり直して来るから、工期は正月に間に合わへんし、ものすごい怒られたわ。

【聞き手】セメントと土を間違ったのですか？

【中　嶋】当時、代用というのがあって、セメントだけだと塗り難(にく)いから、土をちょっと混ぜると塗りやすくなる。その代用というのを現場に持って行くと、たぶん現場では、現場監督さんに見つかると怒るんじゃないかな。だから、セメントと書いてある袋に入っている。古いセメント袋買って来て、それに入れるんだ。色も似ている。それで全然分からんだよ。素人(しろうと)には分からんように作ってある。それを、僕は素人(しろうと)みたいに引っかかったわけだ。それが第一回目の怒られたこと。怒られたって、知らんもんは知らんのやけど……。そんなエピソードがあった。

それから、眠たかったんだろうね。押入へ行って、土を入れて、鏝(こて)を持って動かせるばかりにして、押入の中段に、もたれて寝たもんね。親方はオートバイで来るからね、ブーンといってオートバイが止まれば、塗り出しゃいいでしょ。だけど鏝(こて)を持ったままグーグーと寝てまった、鏝(こて)を持って。そうしたら、肩をコンコンと棒で叩く。「うるさいな」と、それでも寝ていたら、「何やってんや」と、どえらい親方に起こされて、ビックリして塗り始めたことがある。それは怒られなかったわ。それだけやっぱり眠たかったんだろうね。そんな記憶なんかがあるけれども。

その頃、東京オリンピックをテレビで見た。文化財の岡守安、高原孝監督さん、その上に安藤守人監督さんがいて、日本人の入場行進を皆んなで見ようかとなった。たぶん土曜日かなにかで、昼から見た記憶がある。

【聞き手】入場行進、懐かしいですね。

【中　嶋】その当時、オリンピックのコイン、千円だったかな。親方に買ってもらった記憶がある。

◇昼から五時まで、うたた寝

【聞き手】当時の親方は、お城の修理を何棟もしたようですが、伝統的な建物の仕事が得意だったのですか？

【中　嶋】今では親方のこと覚えているのは俺だけだな。名古屋城の話が来たときの親方の考えって、「金なんかいい。ここはやることを目的にしよう。これを皆んなで絶対にやらなきゃいかん」……みたいな雰囲気で見積をした。それをやったので、名古屋城の文化財の監督で中村義猛さんと仲が良かった。もともと性格的に仲良かった感じで、その監督さんが犬山城（愛知県）に口利き（くちき）をしてくれた。犬山城のときは、岡監督が連れてきた丸亀城（まるがめ）（香川県）の仕事をしていた左官屋が二人来ていた。ドイツかアメリカの人も、勉強に来ていた。

【聞き手】左官の勉強ですか？

【中　嶋】大工の勉強で。ほとんど建ってまって、だいぶ出来ているときに現場に入って来た。丸亀の左官屋は常傭(じょうよう)や。一緒にやっていたけど、うちの親方も向こうもプライドが高いんや、一緒にやろうと言わなんだ（言わなかった）。常傭(じょうよう)だで（なので）、どこで仕事する場所を分けてもいいんだけれど、たとえば角(かど)から角までみたいに分けた。

【聞き手】丸亀の左官屋と場所を分けたのですね。

【中　嶋】うちの親方は南の方を取ったんや。冬は暖ったかいから全然違うんだわ。賢(かしこ)いと思った。丸亀の左官屋は、外部が終わったら、寒くて帰って行っちゃった。二人ぐらい応援の人が来ていたけど、やっぱり一人欠け、二人欠けて、だから内部はほとんどうちでやった。

【聞き手】なんでそんな遠くから来たのですか？

【中　嶋】岡さんが連れて来た。岡さんはその前に丸亀城の修理をやっていたから。

【聞き手】昔の文化財修理の監督さんは、修理現場が変わっても、職人さんを一緒に連れて回った人がいたと聞きました。大工さんは、ほとんど一緒に回っていたらしいけど、左官屋さんもそうだったのですか。

【中　嶋】それは分りません。犬山城では、あれは昭和四十年ぐらいやったかな、そのときも一回、夏だね……、お城の中の部屋で御飯を食べてから大の字になって寝てまった。起こされたときは五時

だった。

【聞き手】昼から五時まで寝ていたんですか⁉。

【中　嶋】あれも、あんまり怒られなんだね。寝ることに対しては、あんまり怒られなかった。

【聞き手】きっと、やることをやっていたからでしょう。

◇敷き瓦が割れる

【中　嶋】犬山城が終って、博多の筥崎神宮（福岡県）に行ったんだな。名古屋から神戸までは、名神高速が開通してたから車で行ったんや。夜中の八時に出て、ずっと走って、次の日の朝六時に筥崎に着いた。

【聞き手】なんでまたそんな遠くまで？

【中　嶋】それは、安藤監督さんか中村監督さんか、多分そのどっちかの口利きで筥崎へ行った。行ったときに、持田武夫監督さんと会って仲良くなった。仲良くって言ったら失礼かも分からんけど。良く面倒を見てもらった。

【聞き手】筥崎の出張仕事だったら、親方は行かなかったでしょう。

【中　嶋】来ないよ。

【聞き手】中嶋さんだけ行ったのですか？

【中　嶋】俺ともう二人と、三人で行った。

【聞き手】そのときは、材料から何から全部持って行ったのですか？

【中　嶋】いや、持って行かない。向こうで調達する。道具箱は持って行く。行ったら親方が来るの、飛行機に乗って。俺はカッコいいなと思った。

【聞き手】その頃の飛行機はすごく高かったでしょう。

【中　嶋】高かったと思うよ。それにその頃は福岡空港のまわりの道が泥道だったんや。

【聞き手】空港のまわりの道が舗装してない。

【中　嶋】そう。その道を、ゴム草履を履いて迎えに行った。親方はカッコ良かったな。俺達は見送らなかったけれど、次の飛行機で帰って行った。親方が凄くカッコ良かったから、俺もこれを絶対やったると思った。

【聞き手】筥崎神宮では、どんな仕事でしたか？

【中　嶋】筥崎は建物周囲の雨落より内側の敷き瓦と亀腹。壁は漆喰の上塗だけ取って塗り直し。

これは筥崎ではないけれど、敷き瓦も失敗したことがある。敷き瓦の下地をモルタルでやったんよ。そうしたら敷き瓦が割れた。たぶん下地にヒビが入ったのが、表に来てまったんやね。瓦が負けるんや。敷き瓦の伸び縮みと、モルタルの伸び縮みに誤差がある。

亀腹でもいろんな種類があるね。荒壁の壁土を塗って亀腹を作っているのと、三和土で亀腹をしてあるのと、いらん（いらない）屋根瓦を積んで下地を作ってあるのと、石を積んでやっているところと、亀腹じたい、本当に様々ありとあらゆるやり方がある。その場、その場のやり方をやっていて、結果的に持った持たんは（長持ちしたかしないかは）、担当者が皆んな亡くなってるから分からん。

亀腹というのは水を嫌うことと、土台の下が腐らんように、風通し良くするために、亀腹の分だけ上げたんだろうね。

【聞き手】古い奈良時代の建物だったら、地盤より一段高い基壇があって、その上に礎石（柱下の基礎石）を据えて、土間に柱が立っているでしょう。その後、床が張られるようになり、床と縁が出来て来ると基壇がなくなって、縁の下の位置に引っ込んで、その高低差を亀腹で仕上げるようになるんですね。

◇壁全面にヒビ

【中　嶋】お城の復元をしたときに、糊の強さでヒビの入り方が違うっていうのを勉強したね。

【聞き手】新しく建てる復元工事のときの話ですか？　完成後に見ましたけど、あれは大きな壁ですね。

【中　嶋】そう。ガラスのように入るもんね。ガラスをパーンと叩くと、ピーッとヒビが入るじゃない、

大きく。

今までは、海藻を煮るときに釜に入れて、竹の棒でほぐしながら混ぜていたんですね。糊が溶けるように混ぜながら、竹の棒でタッタタッタ練っていったんです。だけど、そのときは攪拌機で……そのまま固定しちゃって、二時間も三時間も回しっ放しにしていたら、糊が溶け過ぎちゃって、滓がなくなった。同じ糊の量を焚いたんだけど、溶けた分だけ糊が濃くなって、いつもと一緒の石灰と苅の量を入れたもんだから糊が濃くて……全部、塗ったところは割れちゃったんですよね。

普通はアラ（滓）が出るんだ。最後に濾すと半分くらい滓が残る。半分はちょっと大雑把かも分らんけど。

【聞き手】本来、滓になるところも溶けてしまって、濃くなったんですね。竹の棒でかき混ぜていれば、見

海藻糊（角又）を焚くかまど

ているし、手の感触もあるから、糊の加減が自ずと分かるんでしょう？

【中　嶋】今はミキサーで捏ねるので、ダメなのよ。俺たちは全部手で捏ねたから。だから身体に残っているわけよ。ミキサーで捏ねたら、糊の加減が全然分らない。

【聞き手】漆喰を鏝板に乗せて、塗る直前に鏝でまた練るでしょう。塗っているときもそうだけど、粘りがありました？

【中　嶋】あれ、自分で塗ったんですよ。ヒビが入ってから分ったんだけれど、それまでは塗りやすい漆喰だなと思ってた。これはいい漆喰だわと。その後、鋼が掛からん（鋼の鏝押さえが出来ない）、いつまで経っても。

【聞き手】磨きですか。

【中　嶋】磨きがかからない。いつまで経っても鋼が掛からん。それでも小さい壁を塗ったときは、綺麗に塗れたし、ヒビも入らなかったんやけど……。その糊の濃さを聞いた時点で、いつも塗るヤツと違うわと気づいた。だから、やっぱり水が引いて（乾燥が進んで）、ちょっとせわしくて追っ掛けにくい（乾燥が少し早めで、磨きが追いつきにくい）くらいの糊の強さでないと……ノンビリしていてはダメ。

【聞き手】亀裂は、すぐ出たんですか？

【中　嶋】すぐ出たよ。俺はよう忘れんけどね。社員が「壁がガラスのように割れているんだけどさあ」

って電話で言う。「そんなのは普通の一センチか二センチぐらいでしょう?」「いや違う、一メートル以上!」。

【聞き手】大きな口があいてるような割れですか?

【中　嶋】そんなにはあいてない。幅は一ミリぐらい。だから剥がれてはいないんだ。逆に糊が濃いもんで、薄く塗っている。あれは綺麗だったね。それで、その原因が分かったのだけど。

それともう一つは、お城だから松の梁の木口が壁から少し出るじゃないですか。木口に縄を巻いた角材を打って、それで塗って仕上げたけど、松は絶対にいかんな。乾燥してくるとパッと割れるね。

【聞き手】巻き縄では防ぎきれないのですね。

【中　嶋】松は、よく乾燥してないといかんな。

【聞き手】その材木は、中嶋さんの会社が納めたのでしょう?

【中　嶋】最後、それだけ塗り直した。乾燥してない材木だったから、ヒビがこんなに入ったとは言えないじゃない。「おかしいなぁ」って……。(一同笑)

だから、失敗したときには、やっぱり絶対原因があるということだ。その原因を時勢とか、金が安いとか、工期がないとか、そういう問題で解決していくのではなくて、自分達が作るネタのところから原因を追及していかんとダメ、ということなんだわな。工期がなかったとか、金がないでこんなもんだとか、寒さとか、ありとあらゆることを言うでしょう、多少はどうのこうのあるかも分からんけ

どね。それから、資材が悪かったからとか、何々が悪かったと言うんだけど、基本的には、自分がいつもやっている工程を、もう一回同じように確認して行くということ。

とくに今、気をつけなきゃいかんのは、大学を出ようが、高校を出て来ようが、先輩のやるのをそのまま見て、仮にすぐ独立すると、自分の力というものでネタの調合はしきれてないわけよ。身体に染みついていないわけ。

【聞き手】さっきの糊を焚くときで言うと、同じグラムと同じ時間でも、海藻の質の良し悪しで、糊の濃さが変わるのでしょう？

【中　嶋】痩せた糊と濃い糊とある。それと角又と銀杏草は違う。角又の方がどっちかというと、グラムでいくと少なくていい。銀杏草の方が痩せているという感じ。

【聞き手】角又の方が糊が強い。

【中　嶋】今は角又はないですね。銀杏草がほとんどだよね。

昔は勉強する監督さんなんかは、一緒に飯食いに行って適当に酔ってくると、職人はベラベラ喋るから、その辺をうまく利用して自分が一番勉強したいところを聞き出した。その後に、一週間かけて試験をやるんだわね。

試験体の塗り方だとか、そういうのを俺は人にやらせんで、けっこう肌で覚えている。今の子達は、試験体でもミキサーで練るし、バケツ一杯といっても。満タンの一杯と、バケツに目盛りの線がある

一杯を計るとでは全然違う。

【聞き手】古い建物は、上塗の漆喰だけを剥がそうと思ったら、金箆のようなものでザーッと取れますが、お城の新しく塗ったばかりの漆喰は、やり直そうと思ったとき、綺麗に取れましたか？

【中　嶋】取れない。新しいほど取れない。

【聞き手】そうでしょう。どうやって取ったのですか？

【中　嶋】取ってまうん（しまうの）でない。サンダーで壁の表面に傷をつけた。細かいところは、一番粗いサンドペーパーを手につけて、全部傷つけてしまったわけね。表面を荒らしたわけ。

やり直しは、サクいというか、ちょっと粘りの少ない砂漆喰で、一番細かい一ミリか二ミリの砂を使って、壁面を全面に水で洗ってから、それをこすって（薄く塗って）、一週間寝かした。その上に上塗を掛けたから、今は何ともなっていない。

【聞き手】きっと漆喰を取るのが大変だったなと思ったんです。

【中　嶋】取れない。壁めくりというのは、大津でも何でもそうなんだけど、上塗は厚いほどめくりやすい。昔は塗り替え修理が多かったでしょう。黄大津とか、白（漆喰）でも、上塗をパーッとかけて（塗って）、綺麗に仕上げて、土が透けるぐらいに塗ってる上塗があるんだよね。一ミリ付いてないぐらい。こういうのは取れんわ。剥がれない。それが一分（三ミリ）ぐらい厚いやつは、一枚ペラッとめくれる。だから、やっぱりペンキと一緒で糊の濃いのでなく、薄いのを何回か塗るというのが

基本。

【聞き手】上に行くほど薄くですね。

【中　嶋】そうそう。

◇傾いた蔵の癖（くせ）は、すぐには直らない

【中　嶋】民家で、柱が上から下まで通っている、大きい土蔵があるじゃないですか。あいつの傾きをジャッキで起こすでしょう、中にこんな太い仮設の筋違（すじかい）を入れて……絶対いかんな、あんなの請負うもんじゃないと思った。あれだけはダメやねん。せめて三年ぐらい置いてから、上塗をかけんと、建物に傾斜の癖（くせ）がついていて元に戻るで（戻ってしまう）。

これは、ある民家でやったの。監督さんは、「ゼニがないし、これでいい」と。ダメだと言って格闘したけど「やっときゃあ、俺が責任持つから」……そうしたらヒビが出来て、そこのところに水が入って中で黴（かび）たわけ。ある日突然、上塗だけがブーッと割れた。どえらい大げさになって。ちょうど監督さんが替わったので、新しい監督さんに、俺、どえらい勢いで怒られた。そんな言い訳してもしょうがないから、やり直しますということでやり直しはしたんだけれど。やっぱり、あれはほんとすごい失敗だった。

【聞き手】それは、どうして割れたんですか？

【中　嶋】割れたんじゃないって。元々ヒビが入っていて、傾いで（傾いて）いた蔵なのよ。

【聞き手】そっくり下地から塗直したんじゃないんですね。

【中　嶋】古い上塗を取って、上塗だけを塗り直した。だから、そこのヒビだけは、ちょっと斜めにV字型に取らして貰って砂漆喰を埋めたけど。

◇先入観の落し穴

【中　嶋】北海道の現場へ行ったときに……。

【聞き手】寒い北海道に土壁があるのですか。

【中　嶋】旭川なんかでもあるよ、いくらでも。寒いところは木舞が木なんですよ。あるいは葦。葦は地元でなきゃいかんといって、地元で霜のあたった葦を伐りに行った。今思うと、滋賀県で買って来た方がよっぽどいいわけ。地元は背が低いんやわ、二メートルないぐらい。

【聞き手】木舞や間渡の樹種は何ですか？

【中　嶋】椹です。もったいなくて……、高うお金出した記憶がある。

この前、一つ面白い失敗したんですよ。十一月から十二月の十五日ごろにかけて、函館の現場で

荒壁を作った。ぜんぜん凍らなくて、うまく乾かした。

北海道は寒い。外に置いてる荒壁の土が、六十センチ下まで凍ってまう。そんな時期だけど、工期がないでしょう。それで荒壁付けよと言うから、こっちは正反対、ダメだダメだ……。でも、組（建設会社）が「わしが責任もってやる」と言うのでやった。やっぱり細心の注意を払ったし、建設会社に俺達はものすごい勢いで脅したから、夜、ガードマンをつけて二十四時間管理してくれたわけ。外部をシートで張ってもらって、ジェットヒーター焚いて。火は入れれんから（入れられないから）。

【聞き手】ジェットヒーターも火じゃないですか。（一同笑）

【中　嶋】あれはいいですよ。あれを外に置いといて、ホースで熱を送る。それを持ってった。二台は買ったんだけど。

その現場が終わって九州へ行って、お寺の荒壁を作った。こっちのお寺はシートで囲っただけで、ただ風が入らないいと（風が入らなければいいと思った）。そしたら凍ってまって、正月明けから塗った壁を落とした。やっぱり職人の先入観だね。あれが、人間の心理のどえらい先入観の付きかたや。九州は、暖かいからいいやろうと……。九州へ行って塗って、帰ってきて正月や。一月に再た行ったら、カンカンに寒い。どこでも万全の対策で仕事しないとダメや。

でも、やっぱりさすがに向こうの北海道の寒さは違うね。トロトロの土が、カンカラカン（カチカチ）になるからね。九州は固くなるっていっても、上の三寸（九センチ）ぐらいが固まるぐらい。

発泡スチロールを荒壁（あらかべ）の裏表にピタッとくるんでまったらどうやと、今思うけど。

【聞き手】発泡スチロールは断熱効果が高いけど、乾燥しないでしょう。

【中　嶋】隙間（すきま）を少しあけてやるんだよね。発泡スチロールで両方から囲ってやれば、中は暖かいでしょう。

【聞き手】空気を動かさないと乾かないですよ。風というよりも、空気が動いていないと乾かないでしょう。

【中　嶋】これからいろいろ試験してみんといかんね。

【聞き手】さっきの凍った土は、もう全然使えないのですか？　捨てないとダメですか？

【中　嶋】練り直さないといけない。

◇白壁が緑色に

【中　嶋】昔の現場は、出来る限り一般の人は立入禁止ぐらいにしてやったでしょう。だから失敗しても、その中で失敗がバレんように直そうと、そういうゆとりもあったね。

【聞き手】ゆとりかどうか……。（一同笑）

【中　嶋】今は、すぐ報道が来たりなんかしている。

ある記念館の現場では、白い壁が緑色になっちゃったこともありました。夏やったから、ウンカがいっぱい出て来て、壁につくものだから。そうとう塗り替えましたよ。

【聞き手】ウンカって、よく分からないんですけど。

【中　嶋】米に付く、二、三ミリの緑色の小さい虫。往生こきましたね（どうしようもなく困りましたね）。

【聞き手】漆喰の匂いが好きだとか、白い色が好きだとかあるんですか？

【中　嶋】白に寄って来るんですね。夕方暗くなるまで、電気を点けてやっていましたからね、その電気にも。今は稲に薬品なんかを使うでしょう、だからよっぽどでないと見ないけど。まあ、これには苦労したよね。

【聞き手】白壁が緑色になるとは、驚きですね。

◇防腐剤の油が染み出す

【中　嶋】いろいろ苦労、苦労、苦労の連続やった。中塗仕上の壁で、竹の木舞に防腐剤を塗ったことがある。

【聞き手】油性だから土がつかない？

【中　嶋】いや、ついたが、全部出ちゃった。

【聞き手】防腐剤の油が染み出して来たのですか。

【中　嶋】民家で壁が薄かったから。厚い土蔵なら出なかったかも知れんな。これはもう怒られて。壁を全部取って塗り直しましたよ。あんなことするもんじゃないですね。竹が腐るといかんでと、わざわざ自分たちで塗ったんや。

◇天井が綺麗（きれい）に落ちる

【中　嶋】本当に顔が青くなったのは、左官の仕事が終って、新幹線で移動中のこと。携帯電話がかかって来て「天井が全部落ちて参りました。今日、全部掃除しました」と。本当にこれは恥ずかしいが先に立つ。かといって、自分がやっているわけじゃないでしょう。うちの社員がやっているわけで。あとにも先にも、社員は失敗を表に出さないじゃない。それを柔らかく柔らかく聞き出して、こうですよという内容を聞き出すまでがえらかったな（大変だったな）。それは地元に応援を頼んだ現場だった。ネタ（材料）を作ってくれて、そうしたら、ドベの中にセメントをちょこっと入れて練って、二階の舟の中に入れて一晩寝かしてしまった。さあ、明日の朝から塗ろうとなったわけだ。次の日に社員が塗ったわけ。そしたら一日たった後に、全部だよ、ものの見事に綺麗（きれい）に落ちた。本当は二十分

から三十分の内にすぐ使わないとダメなのに、次の日に塗ったから。

一番気をつけにゃいかんのは、土とセメントに気をつけにゃいかん。土とセメントは絶対喧嘩になる。喧嘩ということは、セメントが自分で固まろうと思ったときに、さからって捏ねようとすると強度がゼロ以下になる。固まろうというのを助けてやればいいけど。土の中にセメントを入れて塗ったり、石膏とか入れると、これは皆んな喧嘩してしまって十年持った後は風化しています（十年位しか持ちません）。あれは塗った瞬間から、セメントと土が喧嘩してるわけ。

あの携帯電話が掛って来たときは、本当に俺は現場に戻りとうなかったね。

◇夜中まで仕事する

【中　嶋】ある民家でね、内部の壁は中塗仕上だった。古い民家だから、古い壁が煤を吸って固まっているわけ。そのままじゃ、土がひっつかんから、サンダーで表面の土を落してから、新しい荒壁土をガリっとこすって（薄く塗って）乾かした。それから中塗をしたんだけど。煤で荒壁が中塗の水を吸わなかった。

【聞き手】煤が、荒壁の表面だけでなく中まで入っていたんですね。

【中　嶋】そう。煤があると水引きが悪くなるんだね。それで、中塗の乾きが予想より遅れて、仕上

の鏝が時間が経っても掛けられなかった。もし次の日の朝に、鏝で押さえようとすると乾き過ぎや。

煤の壁を全部落して塗り直したら、普通にやれるんだけど、昔の古い荒壁を使う修理だからね。煤ってどういう成分かね……煙を吸って荒壁の中まで染み込んで、表面だけではない。煤だから水をはじいて吸わないでしょう。それで中塗の水引が悪くて、仕上に困った。夜十時ころまでかかった。

外壁は黒漆喰やね。冬ではなかったけど、なかなか乾かなくて、中庭に面して建物に囲まれていたんで風通しが悪かったから。鏝押さえが出来ずに……あれはもっと遅く夜中の十二時ころまでかかったね。

◇ニキビの肌

【中　嶋】別の民家の外の漆喰壁でね……糊を焚いて篩で濾すときに（焚いた海藻糊の夾雑物を取り除くために、金網の篩を通すときに）、篩の目が粗過ぎてね、漆喰の施工のとき、糊の滓が大きくたくさん出てまった。仕方なく、目の近いところにはこの材料は使用せずに、軒の上の方の目の遠いところに使った。材料は施工する職人自身が作らんといかんね。

それから、糊を濾すときに、目の粗いのを使うと滓も出てしまうことと、もう一つ気を付けなきゃいかんのは、鏝や板で濾したらいかん。

【聞き手】篩の上から鏝や板で、糊を押し出して濾したらいけない。

【中　嶋】そう、篩の上からギュっと力を入れると、まだ溶けてない糊の固まりが出るでしょう。普通に溶けた糊だけにしておけばいいのに、板か何かでこそげ出したらいかん。それで上塗を塗ったら、まだ糊が溶けてないから粒々になる。乾くとね、そこはへっ込むんだわ。ちょうどニキビの肌みたいに仕上がるんだわ。

【聞き手】糊は乾燥すると、ペッチャンコになるんですね。寒天みたいに。

【中　嶋】海藻は最初薄いけど、湯で溶かすと厚くなるでしょう、乾くと薄くなってへこむ。糊はよく煮てね、目の細かい篩で通るだけの糊にしておかないと、無理やり板で押したりして篩を通したりすると、漆喰を練ったときに糊が溶けていないのでダメだよってこと。新人などにやらせて、教えてないとこういうことになる。

◇失敗は、やり直しさせて

【中　嶋】僕が仕事をしてから、文化財を直すのにいろんなことが出て来たと思うけど……。

お城でも、けっこう悪さをしている。悪さってことではないかもしれないけど、長持ちするようにしてある。だって、この世界で生きて行こうとすると、一つ悪い結果が出ると一週間評判になる。

中嶋がやったのが悪かったらしいという言葉が、懇親会などでどこかに行って、飯食って、ちょうど酔った頃に出てくるんや。

【聞き手】「悪かったらしい」ではなく、断定的な話になるのでしょうね。

【中　嶋】この間、講演でちょっと話をしたけど……失敗をした職人さんを、役所とかが別の人に替えるんじゃなくて面倒をみてくれ、と。三回やって三回とも失敗したら、その人はダメかも分からんけど、一度だけ失敗したで、その人を頭からダメにしないで「もう一回味方してやるから、おまえ、自分のお金でもいいからやり直して、市に完璧（かんぺき）に渡せ」と言うくらいの、指導する方（かた）や能力が行政にないとね。失敗した人の中には、自分が失敗したことに対して気が付いている人もいる。ああやりなさいって言われたから、そのまんまに僕はやったんだけど、失敗したという人もいる。だから、きちんといろんな、職人の言いたいことも聞いてもらって、その人が直したいならば、直させてやって欲しい。そうすると、失敗はしたんだけれど、それが分かって自分の力で直したとあれば、これは成功したことになるから、それだけはお願いをしていかないと、地元の左官を守っていける職人さんの腕というものは継続していけない。いい人がいるから、あっちから呼ばって来る（別の地方から呼んで来る）、こっちから呼ばって来るということでは、地元のいい建物と技術は残していけない。お施主さんプラス県とか市の人達には、その辺をお願いしたい。何回言っても、言うことを聞かないというヤツはダメたけど、県や市の象徴出来る仕事をやるわけだから、その人はプライドをもって自信を持